

調査報告

タウンスケープ'71, 舢倉島・海士町 (石川県輪島市)

吉田 襄* 柳田 哲雄** 山本 和雄**
 中山 智博** 小泉 光** 小坂 茂訓**

Townscape Architecture at Hegura-Jima & Ama-Machi, Isikawa-District, Japan

by Yuzuru Yoshida*, Tetsuo Yanagida**, Kazuo Yamamoto**
 Tomhiro Nakayama**, Hikaru Koizumi**, Shigenori Kosaka**

はじめに

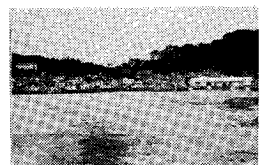
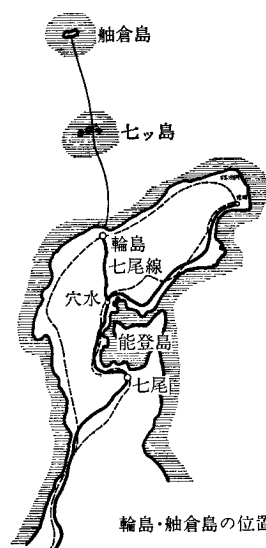
日本海の孤島のきびしい自然の中で、漁をするために、海士達は前進基地としての小屋を作り、やがて集落を形成した。それらは、当初、漁を行うための、ぎりぎりの機能を持つだけのものであり、全く自然発生的なものであったに違いない。今日その素朴な形態は七ツ島の一つ御厨島^{あままち}の海士小屋に見ることが出来る。やがてこの集落は、今日見られる如く、より豊かなものへと発展して行ったのであろう。しかし舢倉島の集落は、その原形的要素を、今日なお多く止めている。我々はここに、きびしい自然条件の中での、生活の場の形成のパターンを見出し、環境(自然+人工)と生活について考察して見たいと意図したのである。

1. 舢倉島・海士町の概要

北陸の中心都市、金沢から七尾線で三時間余り、終点輪島に到着する。輪島市は人口4万の、漆器と漁業を主産業とした、奥能登随一の都市である。また輪島市は、朝市、夕市のたつ町として知られて居り、日用生活品のうち、特に季節の野菜、魚介類の供給は、すべて「市」に依って一般消費者に行われているのである。朝市は、輪島塗りの中心である河井町のメインストリート、本町通りの両側約1kmに亘って毎朝開かれ、夕市は、住吉神社の境内で午後3時頃から日没迄開かれる。特に「4」と「9」の日は、「六切市」といわれ、特に大きい市がたち人出が多い。売手は近隣の農漁村の婦人がほとんど

で、魚介類のすべては、輪島市の北端にある輪島崎町、海士町^{あままち}の二町での収穫物を直接販売している。海士町は昔から海士達の住む所として知られ、戸数330、約2300の人口があり、そして、彼等の漁場が、その沖合50kmにある舢倉島^{あままち}にあって、海士達はその両方に住居を持ち、生活をするという特殊な形態をとっている。

一説に依れば、海士達の祖先は、九州の漁民が対馬海流にのって北上し、漁場を求めて現在の赤崎、吉浦、皆月附近に漂着し、以後、鮑採りに春来て秋帰る生活をくり返しているうち、次第に定住する様になったといわれている。輪島市の中にあって、海士町の人々は、風俗・習慣・方言も他の町の人々とはかなり異なっていて独特の生活を展開している。



海士町遠望



舢倉島小屋



輪島の朝市

* 建築学科助教授
 Assistant Professor, Architectural Division

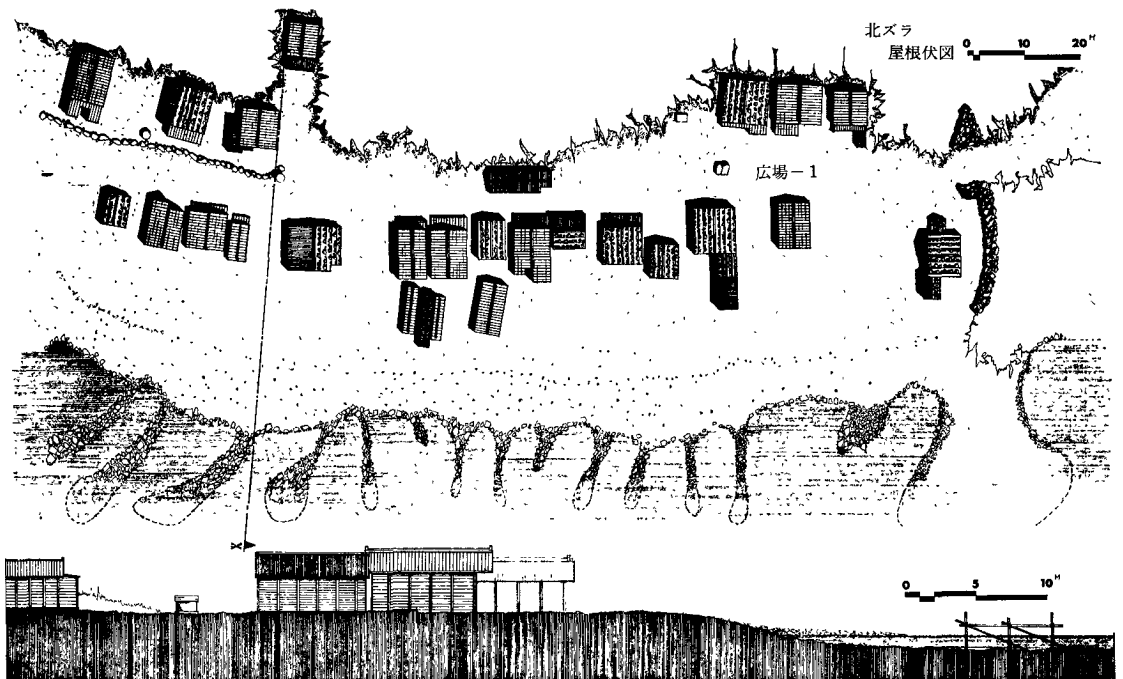
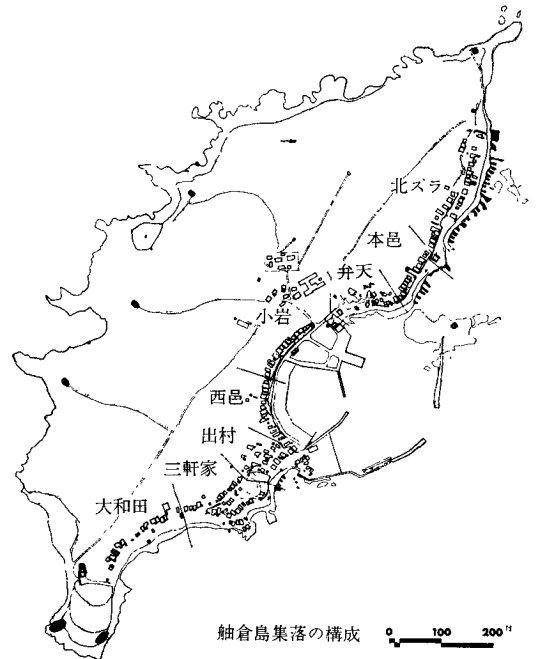
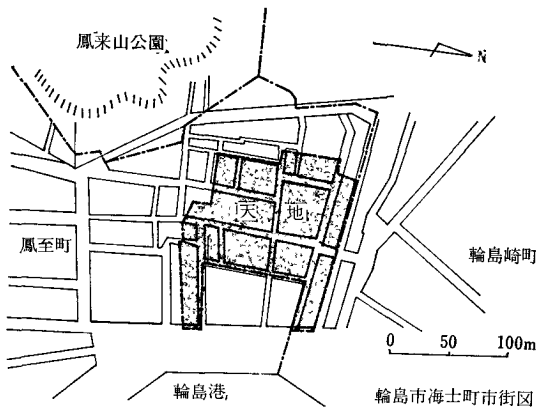
** 建築学科
 Architectural Division

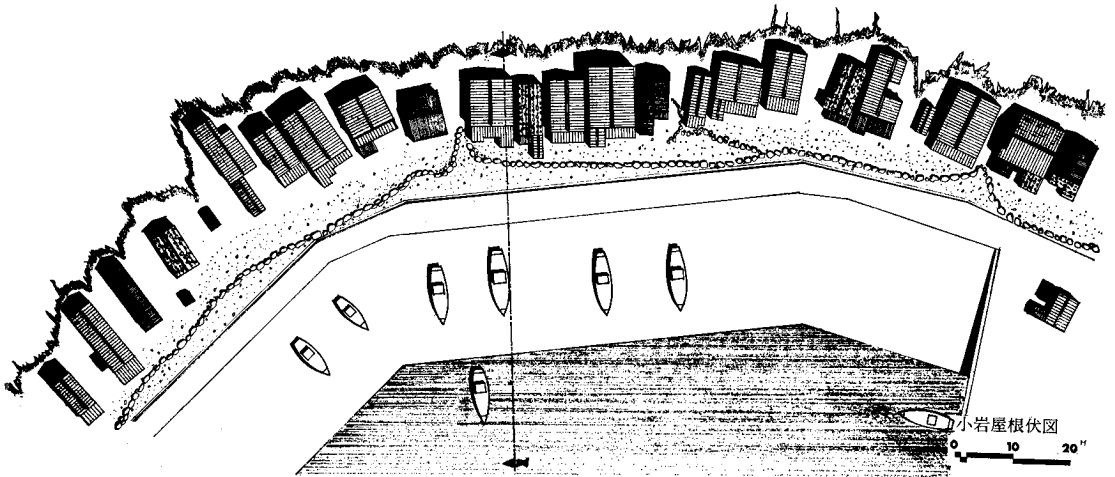
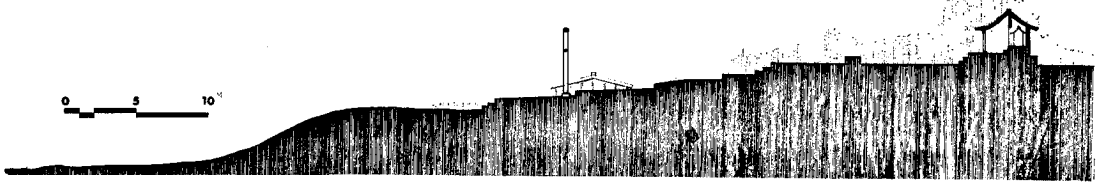
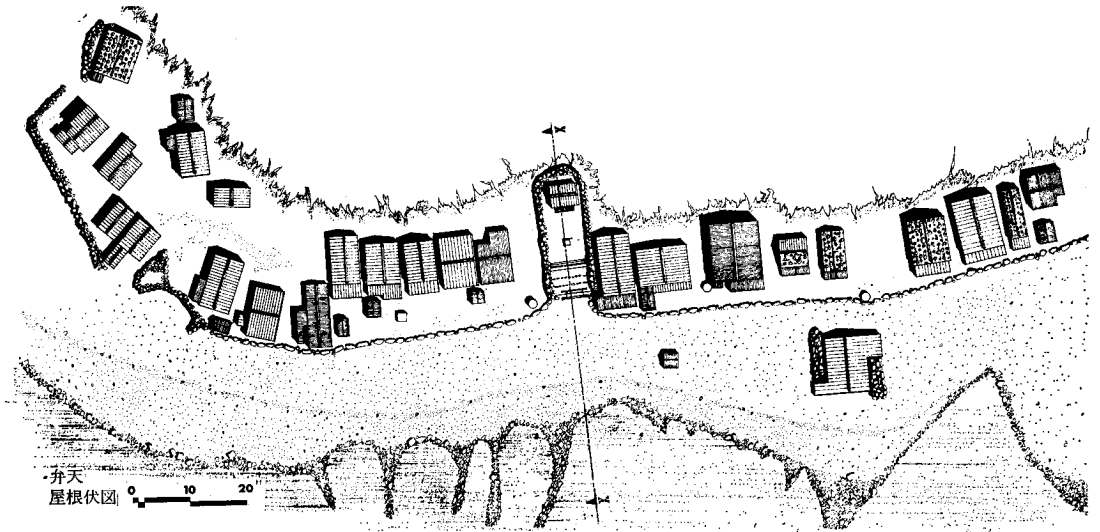
又、海士町の人々は「島渡り」といって、6月始め町をあげて、全員舳倉島に渡り、島を根拠地として、鮑採りを主とした漁を行い、9月になると再び全員海士町に帰って来るといった生活のパターンを形成していたが、最近の技術の発達は、島での越冬を可能にし、一部の人々が島に定住する様になって来ている。

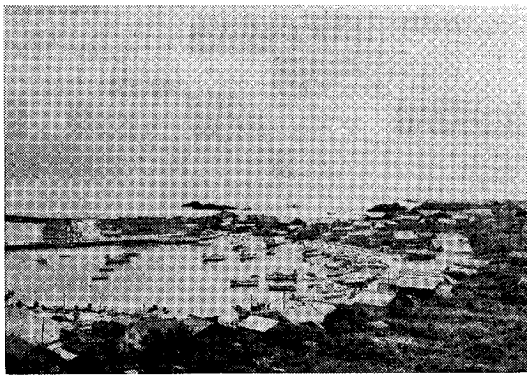
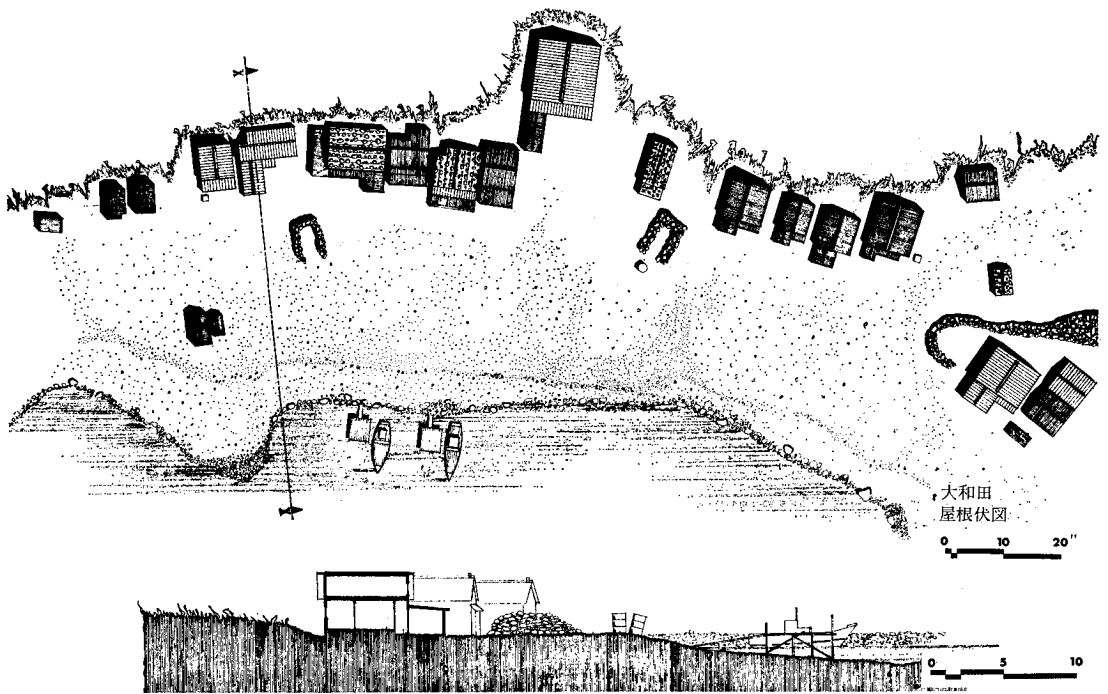
舳倉島は、東西約500M、南北1500M、最高地点、海拔12.4Mの紫蘇輝石安山岩の溶岩流から成り、周囲の海には多数の岩礁がある。年間を通して北側からの風が強く、特に冬期に於ては風速10m/sec以上の日が月の2/3も続く。集落は強風や激浪をさけて、わずかに陰になる南東海岸沿いに展開している。又、北西海岸は激浪のため、10m断崖のとなっている。

2.1 集落の構成

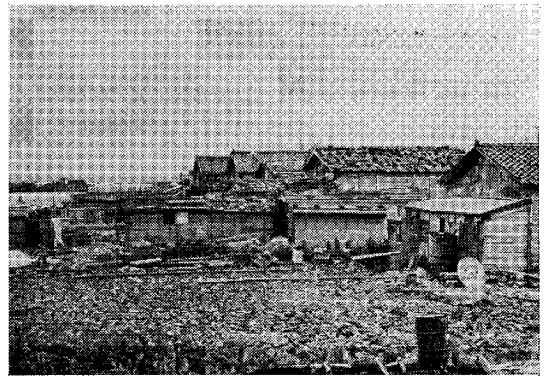
舳倉島の集落は、北東から南西に延びる島の軸に沿って、シベリヤからの卓越風と激浪を避け、又、井戸が南東海岸側にだけ得られるという理由から、南東側海岸に棟を直角にして、ほぼ一列に並んでいる。この島に人が







船倉島港

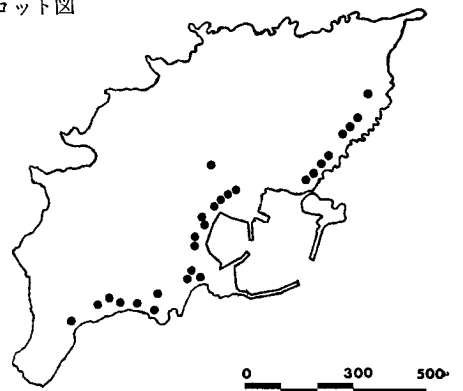


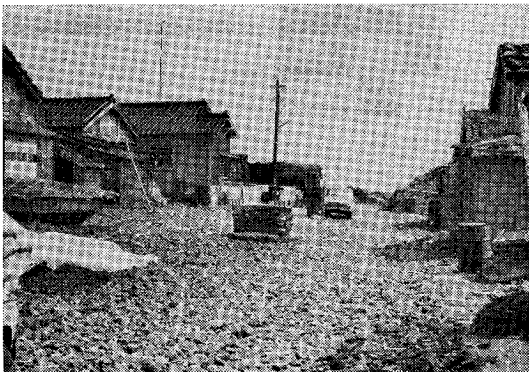
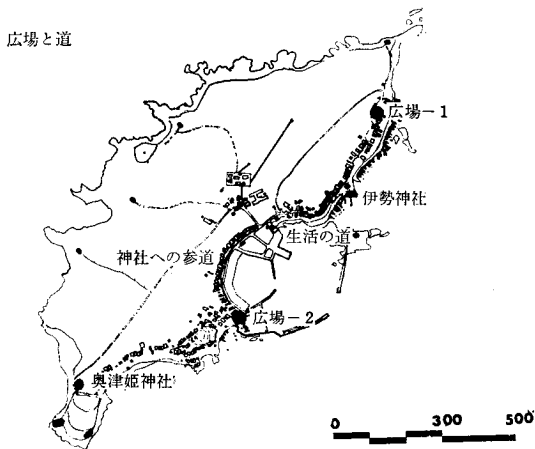
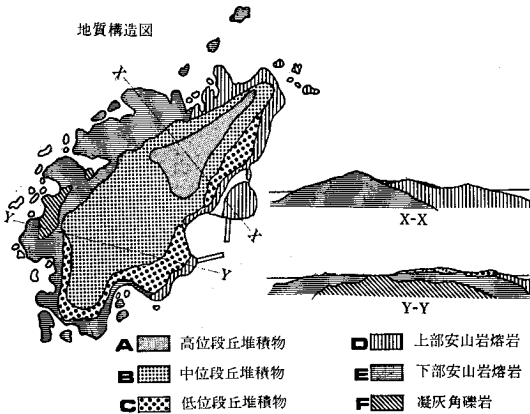
出村の集落



本邑の集落

井戸プロット図





広 場-I

住む様になったのは、海士町の海士達が夏の漁の期間だけ、小屋を建てて住み初めたのが最初で、初期の本邑が出来たのは、江戸時代初期であるが、あく迄も仮の住まいであった。その後次第に住居は数を増し、現在は約200戸あり、そのうち70戸程が定住している。集落は北から南に向って、北ズラ、本邑、弁天、小岩、西邑、出村、三軒家、大和田の各部落により構成されている。きびしい自然条件の中での生活を支えるかの如く、小さなこの島には8つの神社と多くの祠が集落をとり囲む様に点在している。そして島を構成するいく種類の岩石で築かれた多数の石積みや、かつては灯台の代りに、目標としての機能を果たしたと考えられる築島等、石の建造物がある。更に海岸線に沿って各住居を結ぶ様に走るゴロタ石を敷きつめた道、集落から神社へ向かう細い参道住居の前に展開する石敷きの作業場と海に突き出た船着き場等、石を素材とした構築物は、大きな樹や、深い緑をもたない舩倉島の景観の中で、主要な構成要素となっている。

2.2 井 戸

舩倉島の集落の形態を決定づけた要因の一つは井戸である。井上の湧水個所を結ぶ線が、そのまま集落の形態を示しており、島の気象条件と重なり、更に生活上、作業上日照を必要とする事などが集落形態を決定づけるのに作用している。

舩倉島の井戸は、地質の関係で、27ヶ所すべてが南東海岸に沿って、一列に並んでいる。これらの井戸は、海面下1mの水位であるが、真水に近い地下水であるため、古くから避難の出来る島として重要視されていた。

昔はバケツに縄をつけたツルベを各家が持ち、中国製の漆塗りの樽に水を汲み溜めて使用していた。現在は各戸に簡易水道が完備し、各井戸から5軒位が共同使用しているが、この事は、当然の事ながら住居形態に変化を生じ、同時に井戸周辺のコミュニケーションスペースとしての機能を消失させてしまった。



生活の道

2.3 道と広場

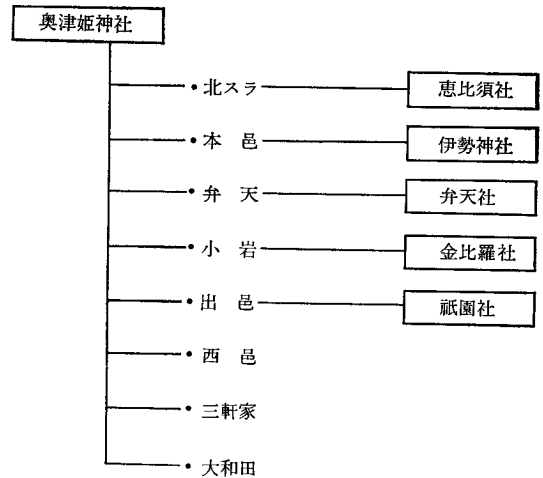
舳倉島の集落の特徴の一つに、海岸から家の軒下迄こぶし大の石で敷き詰められた空間がある。そこは海から1m位登るゆるやかな斜面と、約10m巾の平らな面とから成立っている。斜面は船を置いたり、魚を干したり各住居の仕事の場として使われ、平らな面の一部は各住居を結ぶ道として使われている。この石で敷き詰められた道は歩くという行為に適しているとはいえないが、魚や海藻類を干したり、海士達が海から直接足を汚さずに屋内に入れるなどで、海士達はこのスペースを大切にあつかっている。このスペースは生産のための庭と通行の道との二重の機能を持っている。島の道は各集落を結んで南東海岸沿いに走る海士達の生活に直結した道と、海士達の信仰心から島の周囲に建てられた神社につながる参道としての道とに大別出来る。参道は島の中心軸上にはば位置して南西より北東に走り、更にそれから各社に向う小道で土のままか、まばらに石を敷いた程度のもので生活の道とははっきり区別される。

舳倉島には形態上、オープンスペースは至る所にあるが、広場として機能するスペースは2ヶ所である。一つは集落の北東の端（北ズラ）と他の一つは港の南端（出村）で広場の中央に小さな石を積上げ、更に大石をのせて作った御興台がある。この台は伊勢神社境内にもあり、島の南端の奥津姫神社の祭礼の時、御興の安置場所として使用される。通常は漁網を干す他、仕事の場所として

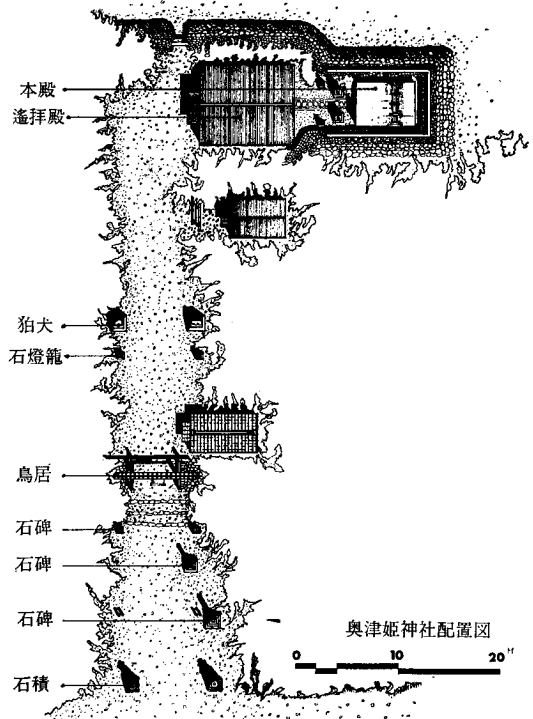
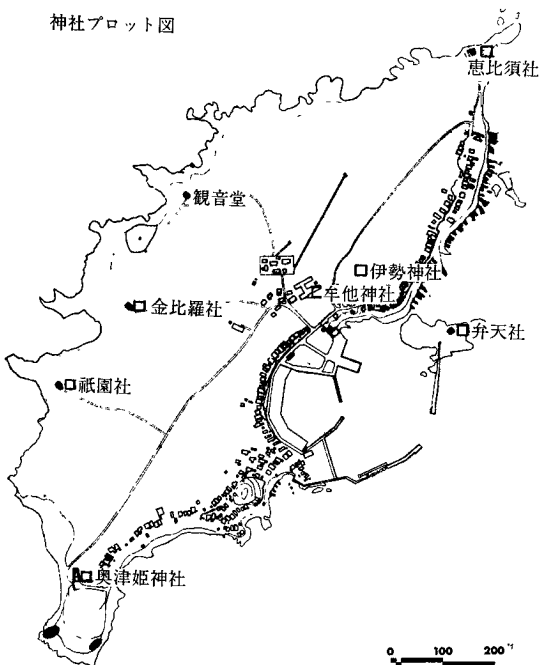
使われている。

2.4 神 社

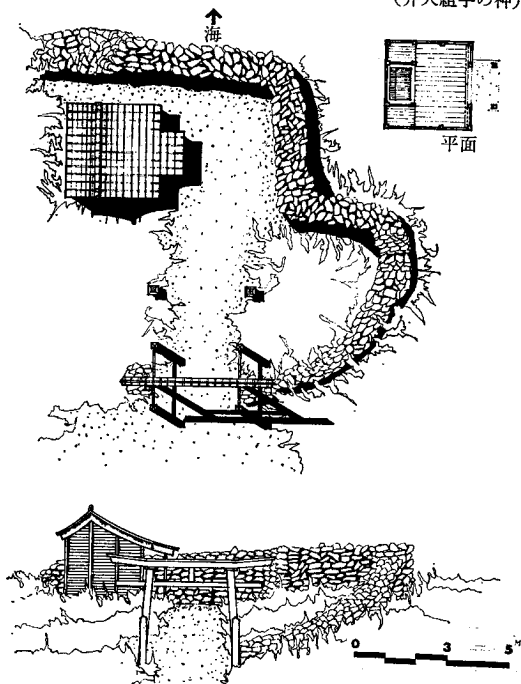
舳倉島には村社である奥津姫神社（この神社は田心姫命を祀り、海士達が九州の出身であったという由来を物語るものである）と字の神である恵比須社、伊勢神社、弁天社、金比羅社、祇園社、牟他社の6つと観音堂が島を守る砦の様に囲んで配置されている。したがって島の人々は、少くとも奥津姫神社と字の神の二つを祀っている。この他に数多くの地蔵や祠が島内各地に散在してい



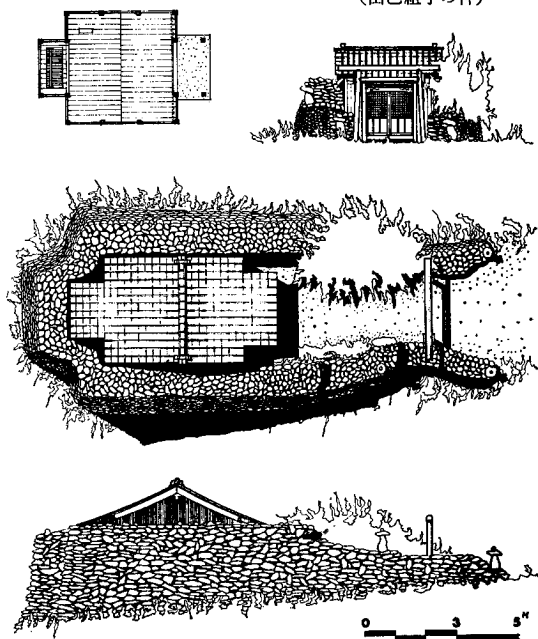
神社プロット図



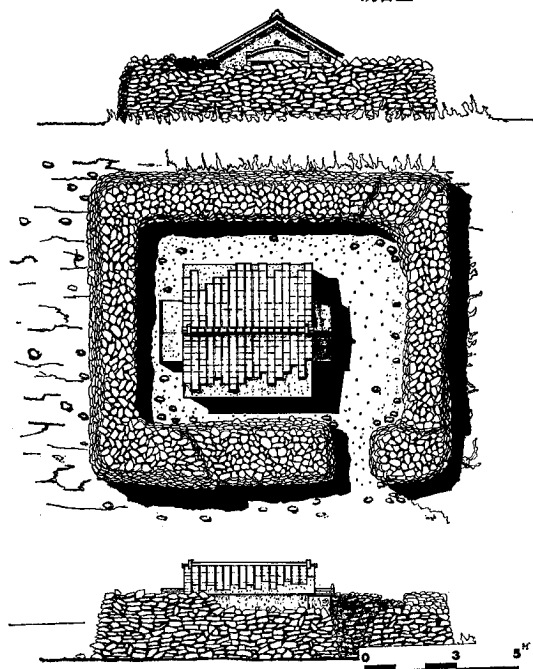
弁天社
(弁天組字の神)



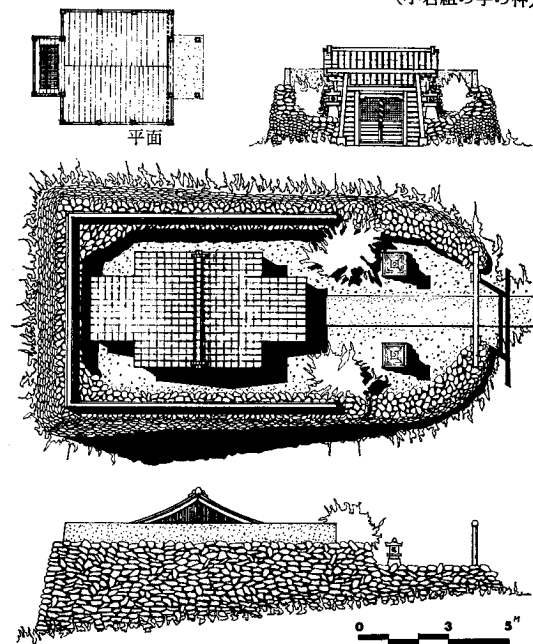
祇園神社
(出邑組字の神)



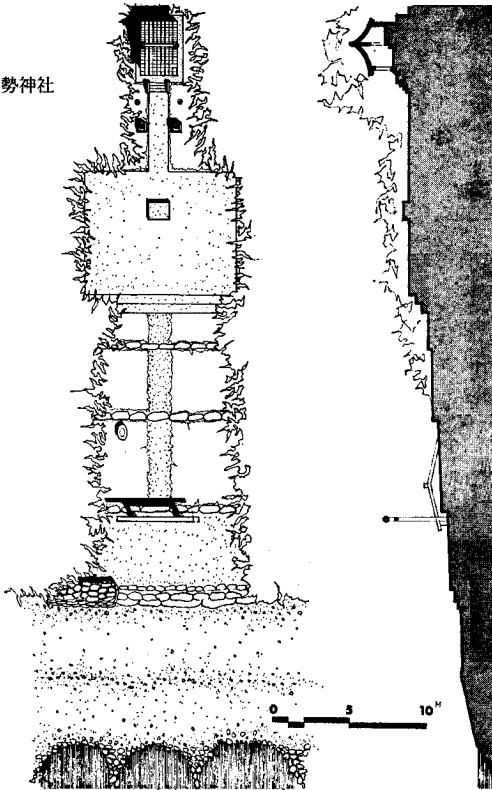
観音堂



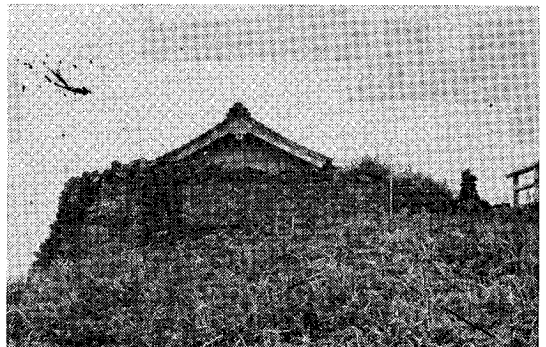
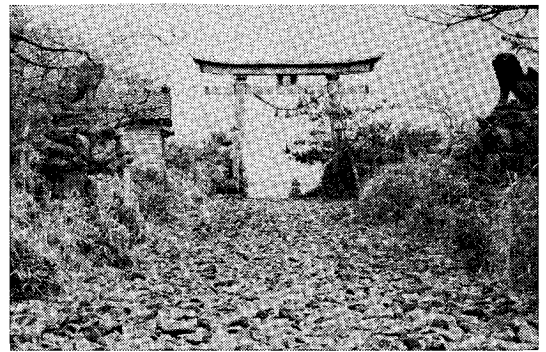
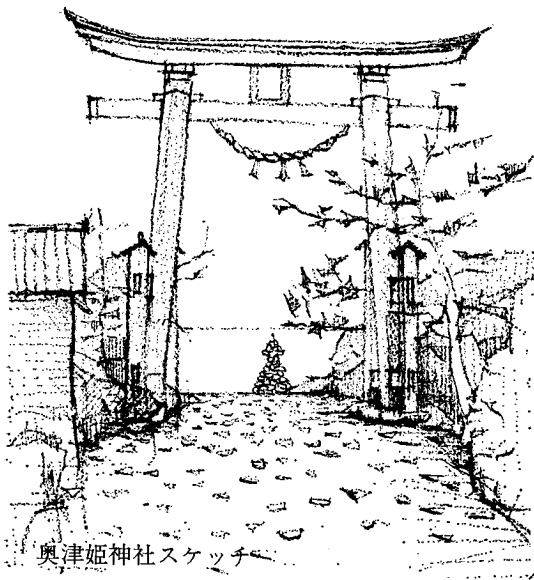
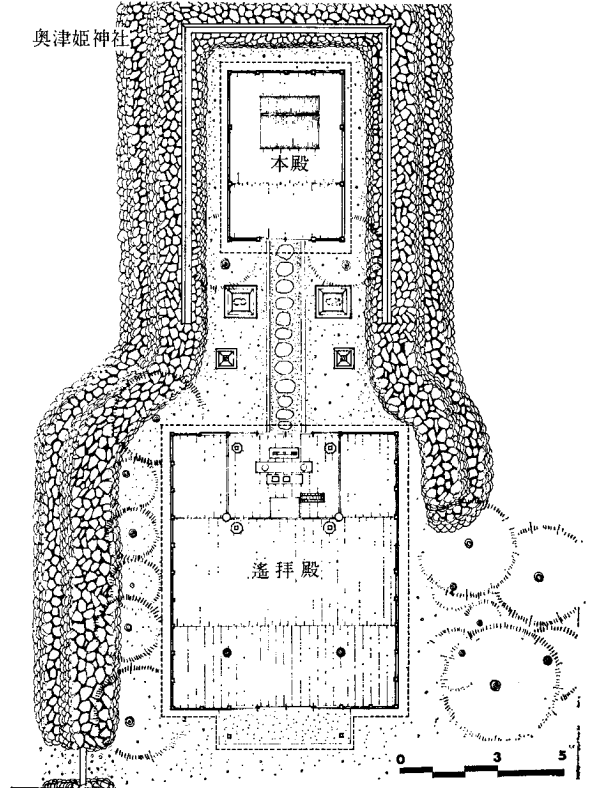
金比羅社
(小岩組字の神)



伊勢神社

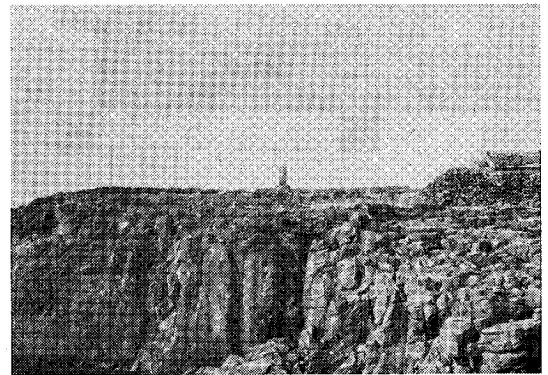
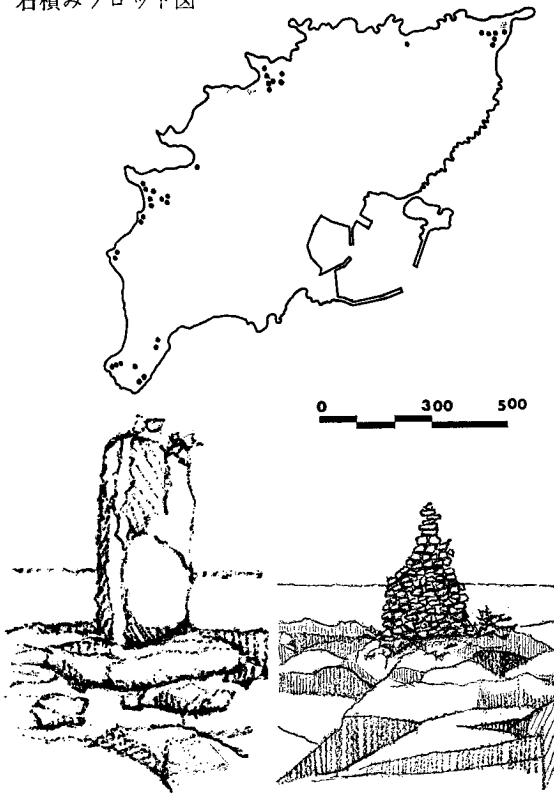


奥津姫神社

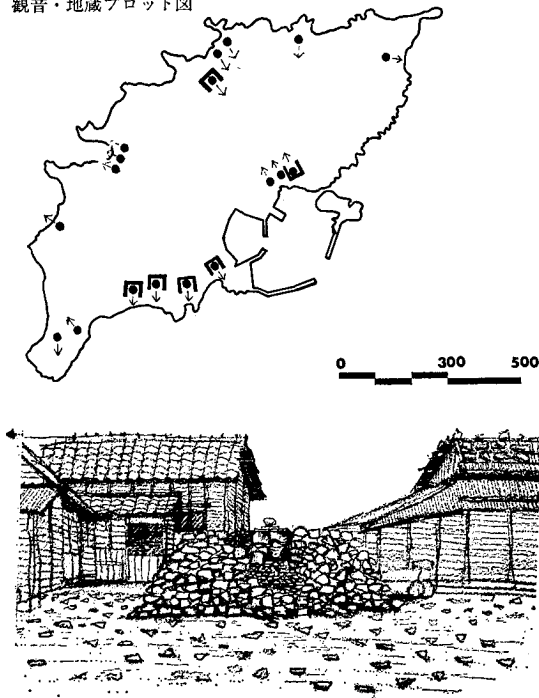


祇園社

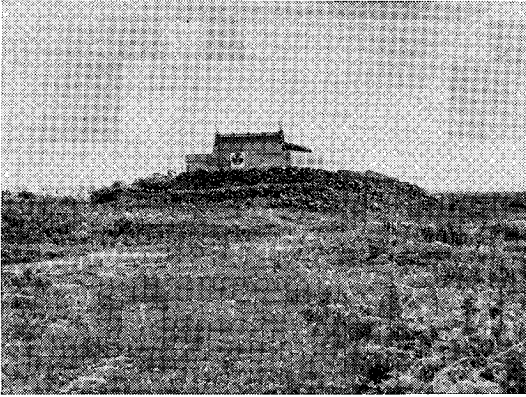
石積みプロット図



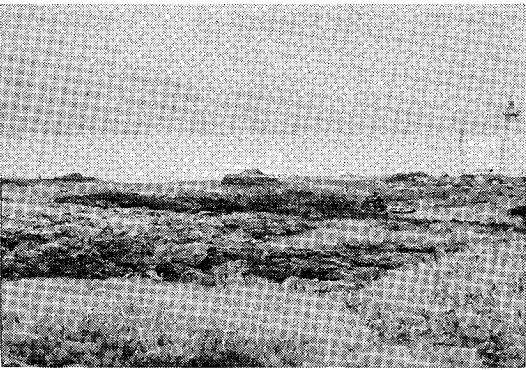
観音・地藏プロット図



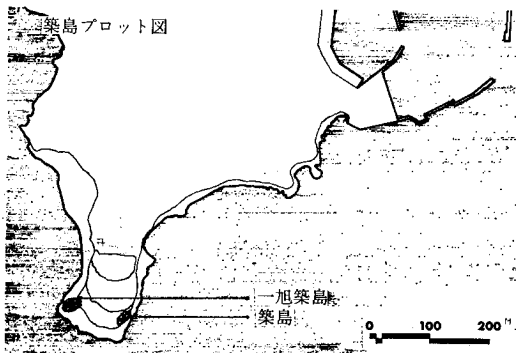
石積み遠望



奥津姫神社



築島遠望

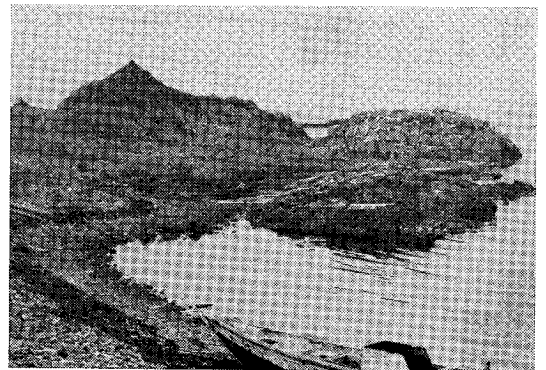
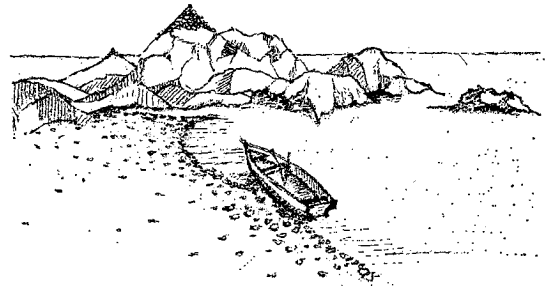


る。この様に多くの神社や祠が存在するのは、大自然に対する人々の畏れと尊敬の念のあらわれであろうか。鮑や絵馬等神社に捧げられた奉納物を見ても、自然の恵みに感謝し、漁の安全を祈願する姿勢がよく伺うことが出来る。これら神社の多くは強風を避ける様に周囲を石垣で囲んで建てられて居り、この形態が以前の舳倉島の住居の形である。近年住居を囲む石垣は、港の構築に際し、石を供出したため、その形態を留めるものは少ない。

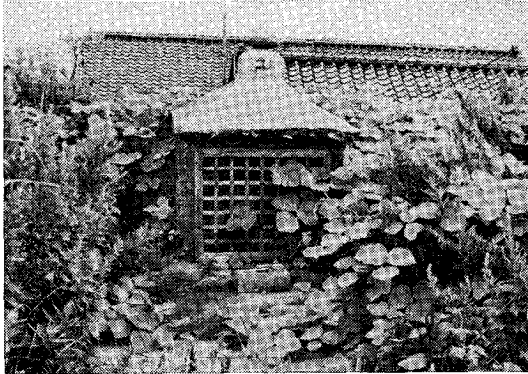
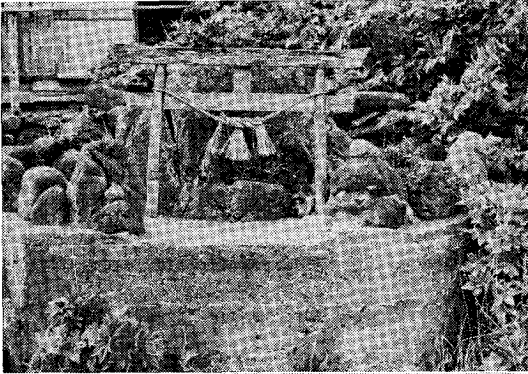
2.5 石積み建造物

古代の人々が石に対して本能的に、永続的で神秘的な力を信じた如くに、舳倉島の人々の石を積むという行為の中にも深い信仰心が潜んでいるに違いない。この島に伝わる「こもり岩」の伝説や竜神の怒りの話などにその片鱗を伺うことが出来る。又、舳倉島は最高点 12.4M という平坦な島のため、寛政5年6月、漁に出た海士達が島を見失しない、多くの犠牲者を出したために、石を積み上げて島を高くし、目標を作って再度の悲劇を防ごうとしたともいう。

島の見通しの良い所や、崖のふち等に石積みが多く見られ、その中のいくつかは、造形的にも明らかに目標となり得る形態をとり、また別のものは宗教的造形（灯籠や地藏）を感じさせるものも存在し、島内至る所に様々の規模の石積み建造物が見られる。



一旭築島



観音地藏



石積み（ケルン）

2-5-1 築島

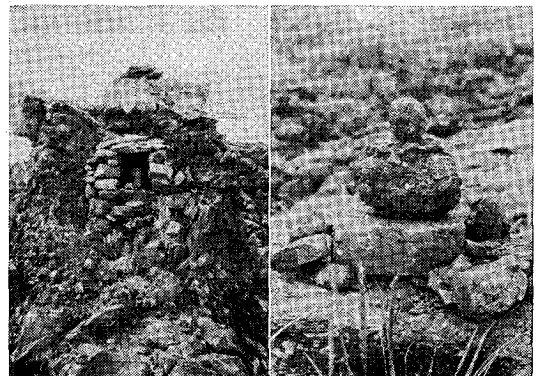
舩倉島にある最も規模の大きい石積みで島の人々は築島^{つぎしま}と呼んでいる。築島は島の南端、つまり輪島海士町を出港した船が最初に見える位置にあり、目標としての機能を有している。もう一つの機能は、死者を埋葬した墓としてのものである。築島の小さい方は一旭築島と呼ばれ、一旭という僧が、海士達が帰った島に冬期一人残り、築き上げたものである。積石塚の形態は、対馬の佐護島、筑前の相の島、出羽の飛島の賽の河原と呼ばれるもの等や、日本海の島々には石を積んで埋葬する風習が7,8世紀頃から見られた様である。舩倉島の築島もその一つであると考えられるのである。

2-5-2 石積み（ケルン）

島の断崖附近に多数の石積みがある。規模は小さいが「目標」としての機能は充分果している。石積みが、低い平坦な島の「水平」の要素に対して「垂直」という造形的に対立した形態をもつためである。更に「色彩」の要素が加って来ると目標としての機能は一層はっきりして来る。石積みの中に、かって白い石で造られたものがあり、海面に浮ぶヨットの帆の様にあざやかであったという。石積みの中には造形的に宗教的においを感じさせるものもいくつかあり、見方に依っては石灯籠や供養塔の様に見える。

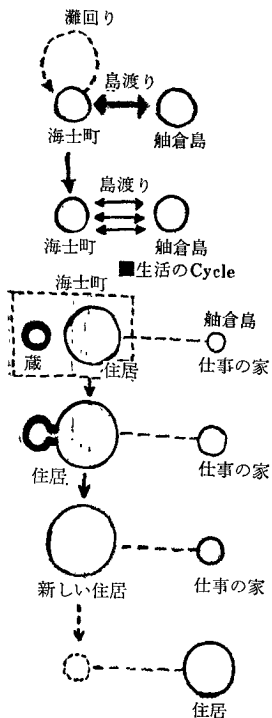
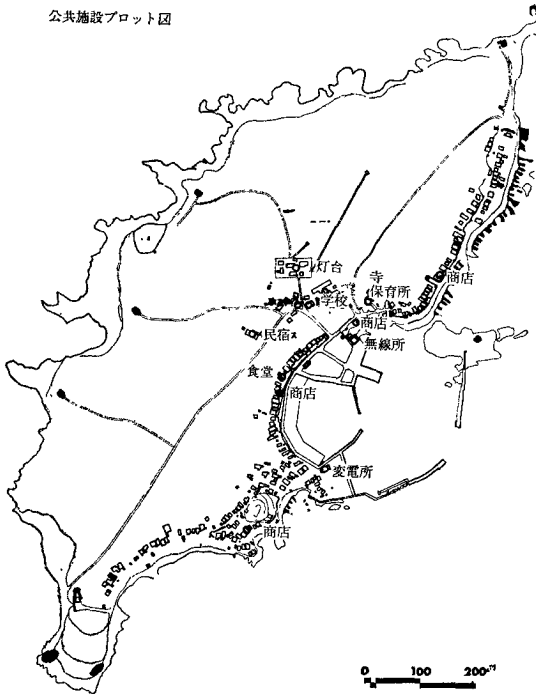
2-5-3 観音・地藏

宗教的なにおいのする造形の石積みの他に、お地藏さん、お観音様と呼ばれる信仰の対象となっている簡素な^{ほころ}祠がある。お地藏さんは海に向かって石で囲まれて建っていて、潮風にさらされてその形を留めない程いたんだものが多い。又、海士達が御観音様と呼ぶものが島の周りに33ヶ所あるといわれているが数は明らかでない。これらは住居の前に石を積み、観音様を囲む様にして海



祠・地藏

公共施設プロット図



1 舳倉島住居の変遷

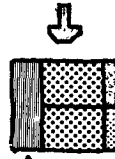


船

コtentと呼ばれる5丈2.3尺の小さな帆掛船で移住生活を送っていた。

土間+板間+収納+神棚

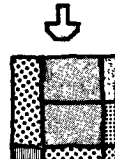
2



最も初歩的な住居形態であり「海士小屋」と呼ばれた頃の住居である。

土間+板間+寝間+収納+神棚

3

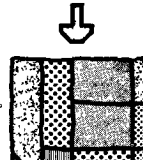


2の形態の板間にタタミが敷かれ、土間にも床が作られ、前方に縁ができる。これが現在の住居形態の原型である。

Aタイプ

〔3〕+納屋

4



以前の形態に漁獲物を塩漬し、保存する納屋ができる。

Bタイプ

〔3〕+水場

5

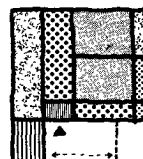


近年自家水道の完備により水を使う空間水場が母屋から突き出すように増築された。

Cタイプ

〔4〕+水場

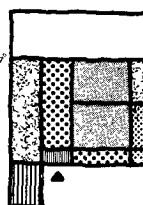
Dタイプ



上図と同様の意味である。この場合水場は左右いずれかに増築される。

〔5〕+居間or付属室

6



Eタイプ

家族構成の変化により居室を増築した形態である。又は便所などが住居内に作られるようになる。

寝間	収納
板間	神棚
土間	水場
	納屋

に向けて建ててあるものが多い。

2-5-4 船着き場

石積み建造物の一つに生活に直結したものとして船着き場がある。船着き場は各住居の港である。石で船着き場を作るのは地形上湾がなく、波を直接受ける海岸線が直線状の地域に見られる。島の豊富な石を利用して、海へ向って5~10M程突出す様に積み並べ、1隻分の港を数多く作っている。場所によってはこの上に棧橋を作り、作業台として利用している。

2-6 公共施設等

- ・灯 台 大正6年の設置に依り、舩倉島々民の生活の安全に大きな影響を与えた。特に定住者の増加を助長した。
- ・学 校 明治20年夏季分校として設置され、以後も夏期、冬期と二分して舩倉島と海士町で教育を行っている。
- ・発 電 所 昭和33年設置される。ディーゼルエンジンに依り電力を供給。
- ・駐 在 所 昔は警察官も島民と一諸に島渡りを行っていた。現在は輪島から1週間1回派遣されている。
- ・商 店 1971年現在、島には2軒の商店、1軒の食堂、2軒の宿泊施設がある。商店は日

港

・寺(保育所)

常雑貨程度で野菜その他の必需品は「あすなろ丸」が毎日運んで来る。

島と輪島市を結ぶものとしてあすなろ丸橋がある。毎日、輪島と島を往復する定期船「あすなろ丸」は情報源であり、よろず屋の店舗でもある。共同井戸がなくなった現在、唯一のコミュニケーションスペースはこの棧橋附近である。

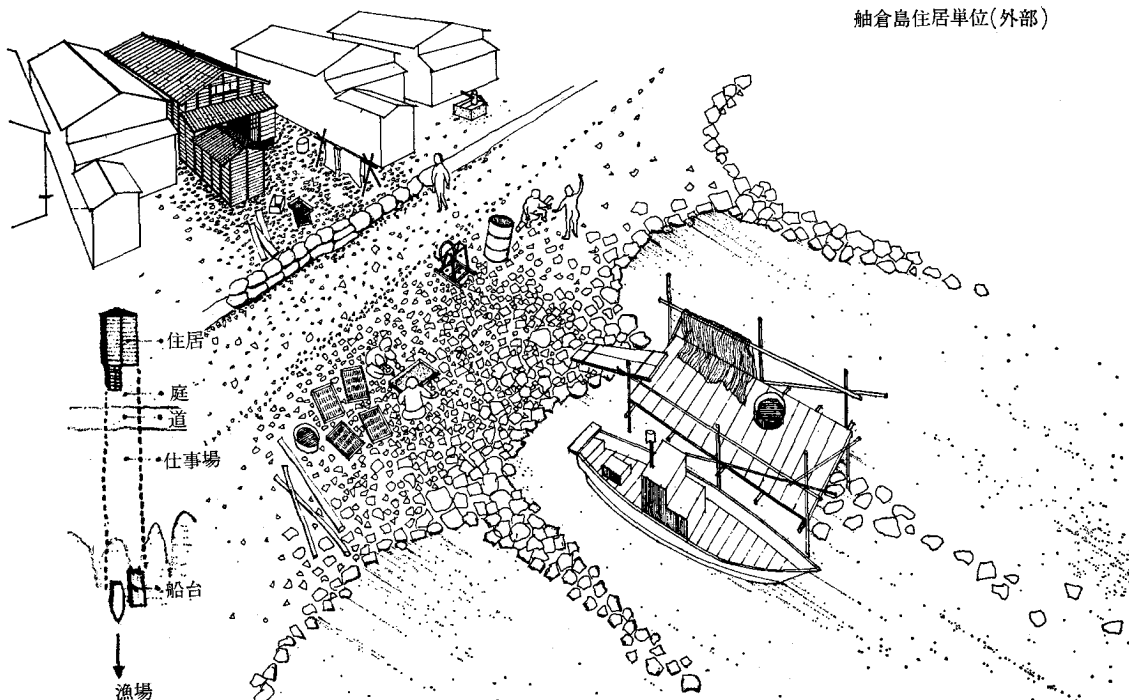
法蔵寺分院と呼ばれ、海士町にある法蔵寺の分院で平氏の落人に依って開基され、真言宗であったが、現在は海士達の持って来た浄土宗となっている。現在は寺としてよりも保育所としての機能が強く、へき地保育所の看板が下っている。

3. 住 居

3-1 二 住 居 性

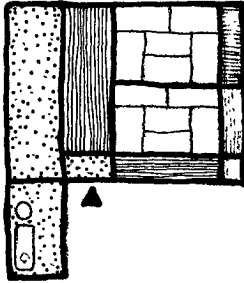
昔、海士町の人々は6月初旬、町をあげて舩倉島に渡り、9月末帰町し、正月迄「灘廻り」といって漁獲物と農作物の物々交換のため、船で各地を廻り、残りの6月迄を海士町で生活していた。つまり1年を三分して、その生活の場所が異っていたのであるが、昭和20年頃から灘廻りの風習が消え、現在では海士町で8ヶ月、舩倉島で4ヶ月を生活している。海士達は海士町では昔から

舩倉島住居単位(外部)

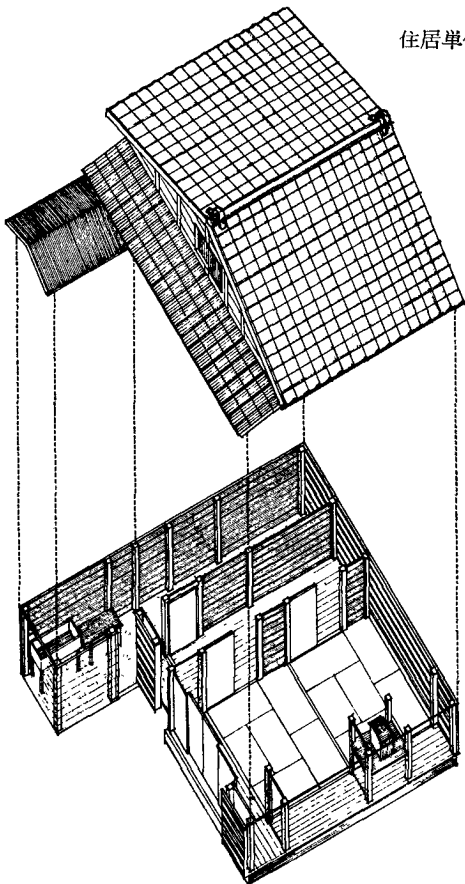


の古い住居に住み、手狭になると蔵と続けて家を改造し、それを補った。そして、第1に舟を、次に舢倉島の仕事の家を、そして生活にゆとりの出来た時に海士町に立派な家をたてることを信条としている。舢倉島の家は生産の根拠地としての家であり、海士町の家は生活全ての根拠地であるわけである。この事は当然のことながら、家の平面や造られ方にもあらわれている。

舢倉島に於ける住居の配列、部落のグループ分けは、



舢倉島住居基本型



住居単位構成

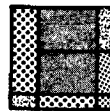
海士町の住居配置とは無関係で、海士町の住居の位置関係はランダムである。

3.2 舢倉島の住居

舢倉島の住居の多くは切妻・妻入りで妻方向を海岸に向けて建てられて居り、この様な形態は北陸海岸地帯の集落にしばしば見られるものである。各家は、住居から海迄の空間を自由に使用している。隣家との境界線は明らかではないが使用上では明確に区切られている。

外部空間は、住居→庭→道→作業場→斜面→船着き場→海と一直線上に構成されている。そして軒下から海迄がしっかりと石で敷きつめられている。庭は海女の道具などが置かれ、洗濯物を干す等、女性が多く働く場となっている。この部分は比較的私的要素の強い場所である。次に一段下った部分が道であり、次が作業場である。しかしこの部分の境は明確でなく、車の通った跡がわずかに道と作業場を区別している。ここは、漁網を干したり、修理したり、魚介類を干したりと、男が働く事の多いスペースである。ここから海に向かって下り、海迄の斜面は船を引上げ、修理する場となって居る。そこから比較的大きな石を積み上げて船着き場を形成している。

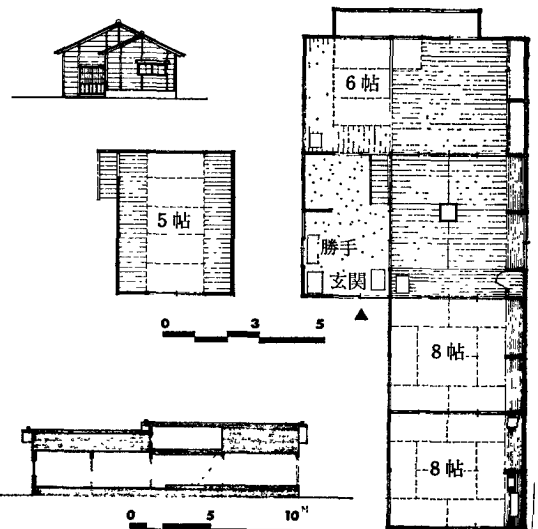
内部空間は大きく分けて、4つの空間から構成されている。第1は入口から奥へ続く板の間でタンス等家財道具が置かれたり、作業をしたりするスペースである。第

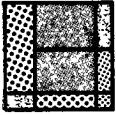


タイプA

- ・白崎家
- ・本邑組
- ・6人

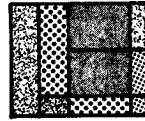
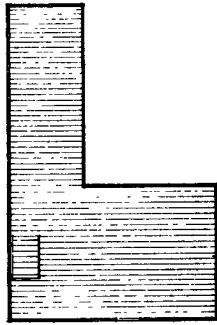
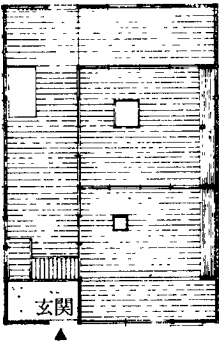
・108.72m²(23.25坪)





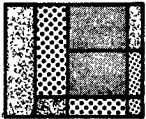
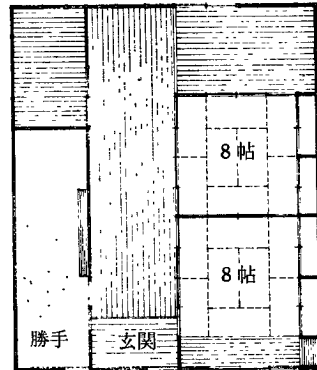
タイプA

- ・富水喜兵
- ・北ズラ組
- ・60.80m²(18.4坪)



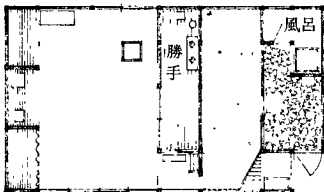
タイプB

- ・演谷庄之
- ・小岩組
- ・4人
- ・98.28m²(29.9坪)



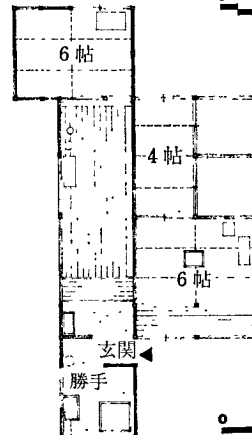
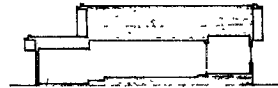
タイプB

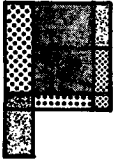
- ・中村義八
- ・北ズラ組
- ・5人
- ・49.9m²
- ・(15.1坪)



タイプC

- ・岩田家
- ・小岩家
- ・59.1m²(17.9坪)





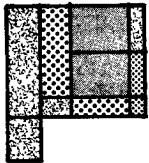
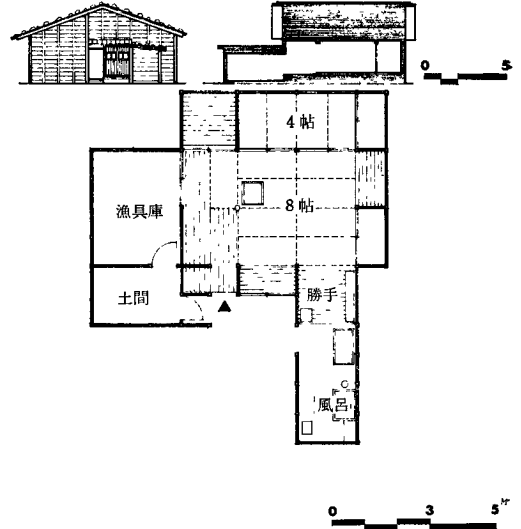
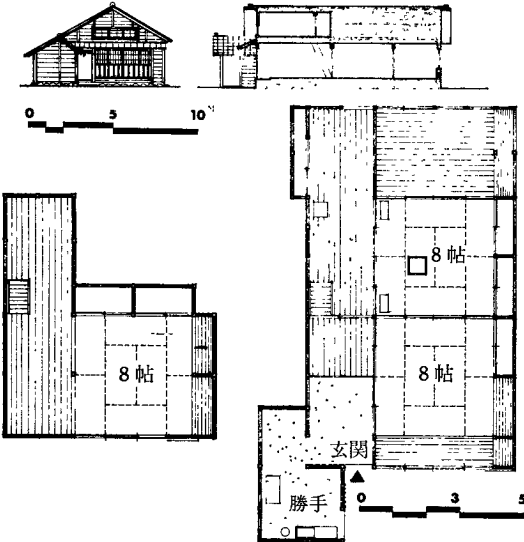
タイプC

- ・坂口住吉
- ・小岩組
- ・8人



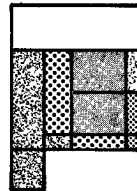
タイプD

- ・白崎権三郎
- ・大和田組
- ・6人



タイプD

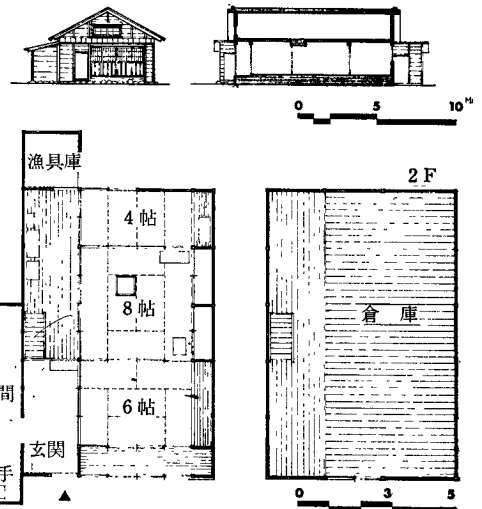
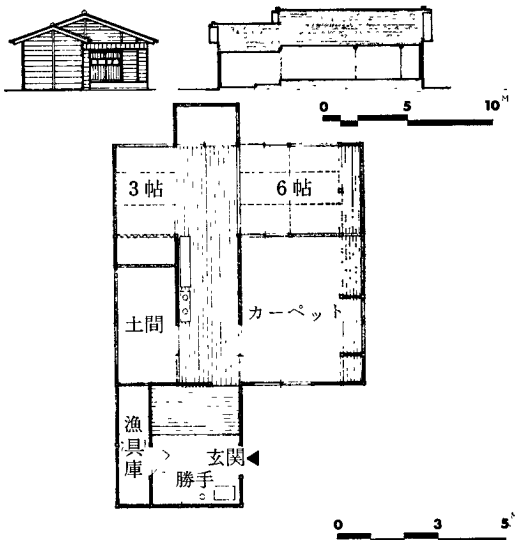
- ・門木とめ
- ・大和田組
- ・3人



タイプE

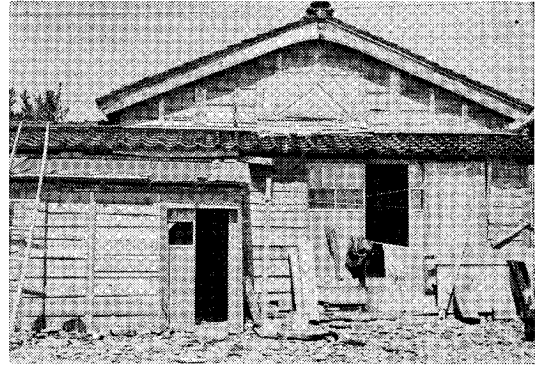
- ・小岩覚平(区長)
- ・小岩組
- ・8人

・1F: 67.7m²
 ・2F: 52.9m²
 計: 120.65m²
 (36.7坪)

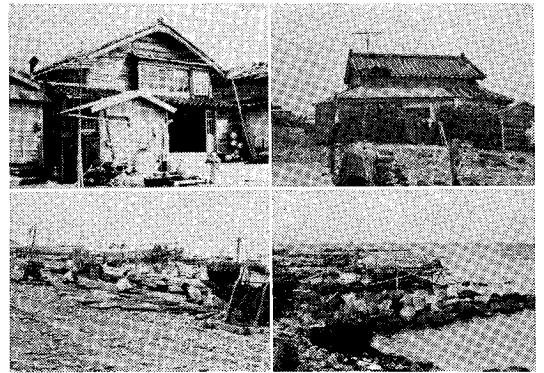




住居一Ⅱ

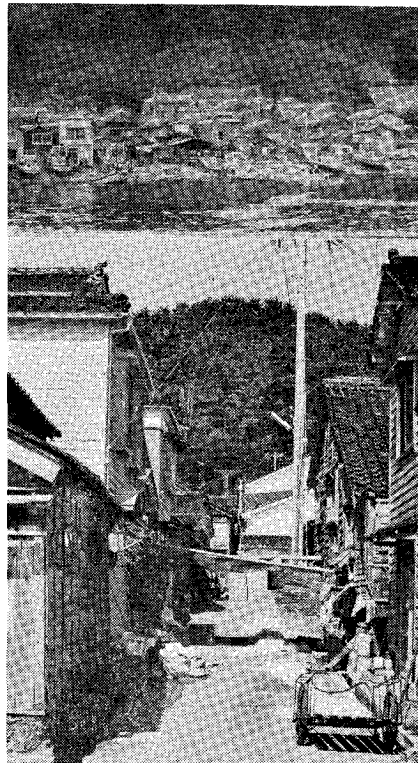
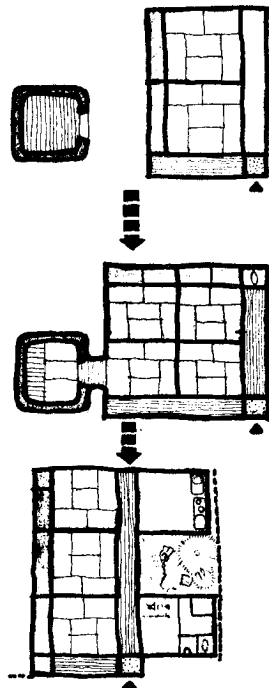


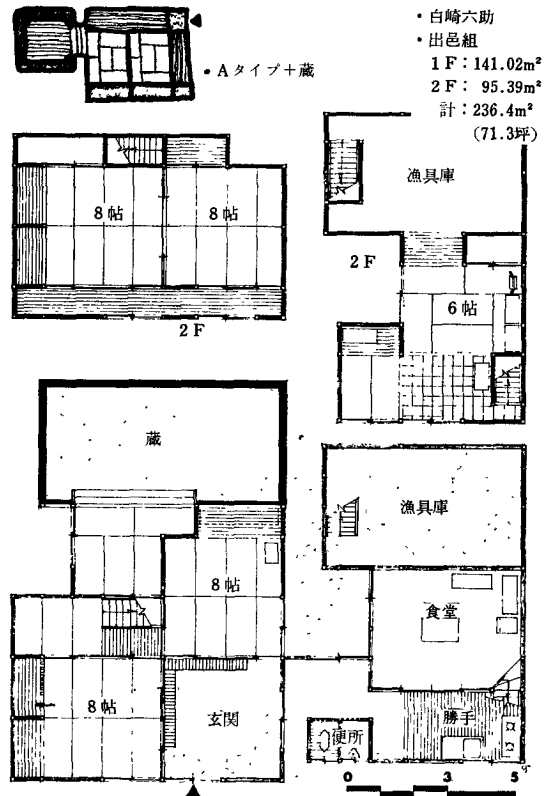
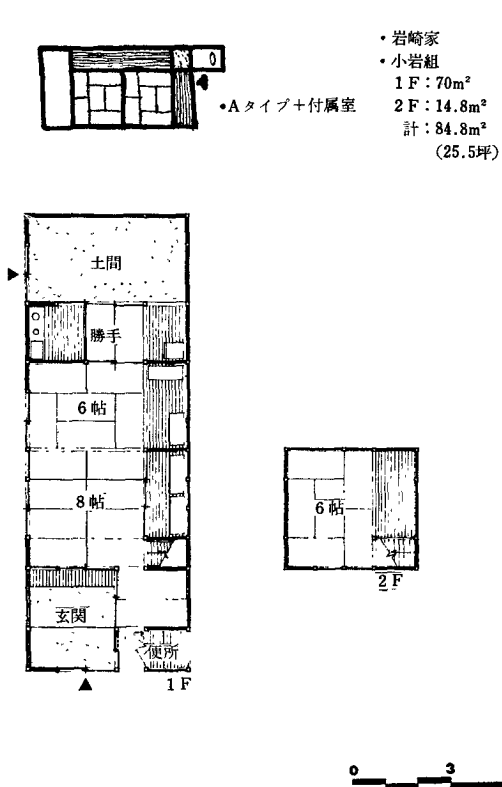
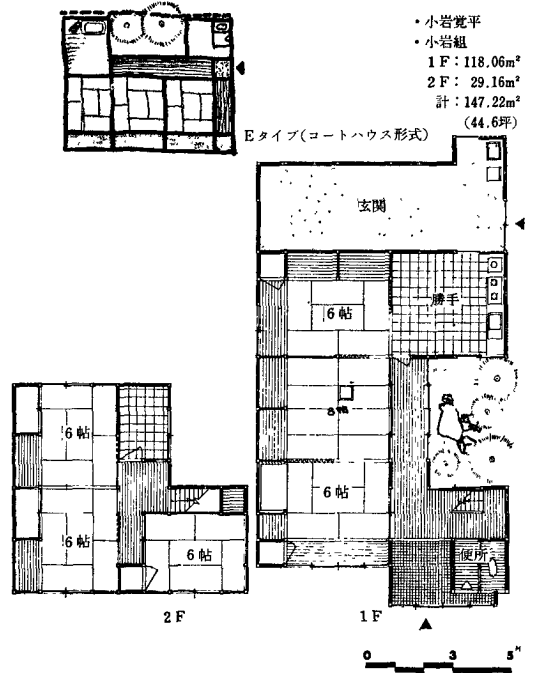
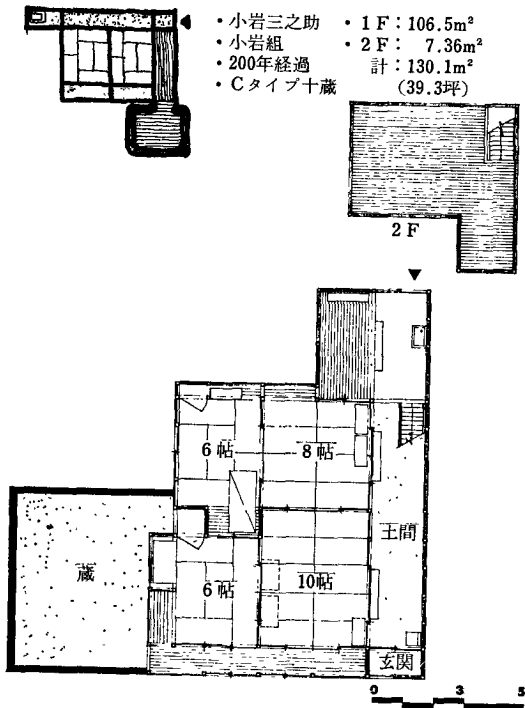
住居一Ⅱ

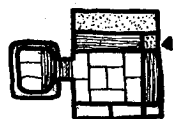


船着き場・住居

海士町住居の変遷

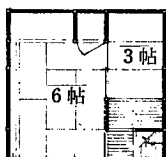
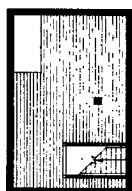
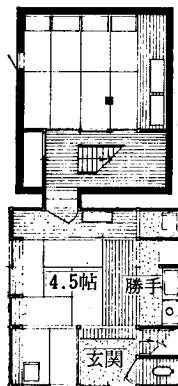




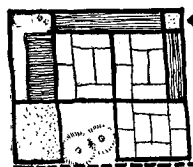


Aタイプ+蔵

- ・加川久六
- ・小岩組
- ・3人
- ・1F: 51.2m²
- ・2F: 42.9m²
- 計: 94.1m²
(28.5坪)

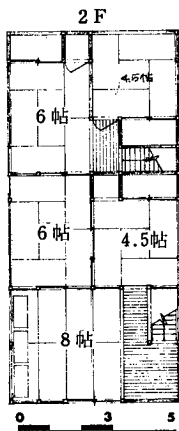
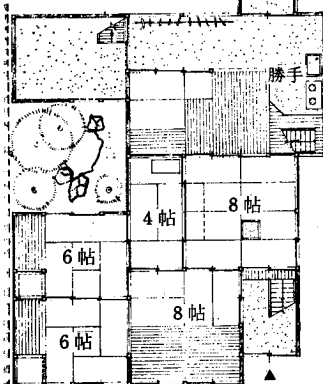


0 3 5m



- ・Dタイプ
(コートハウス形式) ・富木富次郎
・北スラ組

- ・1F: 85.1m²
- ・2F: 74.4m²
- 計: 159.5m²(48.4坪)



0 3 5m

1は板の間と障子で仕切られたタタミの部屋である。こ
こは6帖2間が基準となっていて奥の部屋には神棚があ
り奥津姫神社と字の神を祀ってある。手前の部屋には押
入れがあり、多くはフスマがなくカーテン等で仕切れ
られている。更に手前は板の間でもろもろの家財道具が置
かれ、網のつくろい等もする場所である。第3は塩漬けを
作り、保存する土間で漁具等も置かれている。第4は土
間の前に突出した水場で、この部分は水道が完備した近
年つけられた所である。便所は住居の背後の傾斜地に
20M位離れて独立して建てられている。この基本パ
ターンをもとに様々のヴァリエーションが展開している。

3-3 海士町の住居

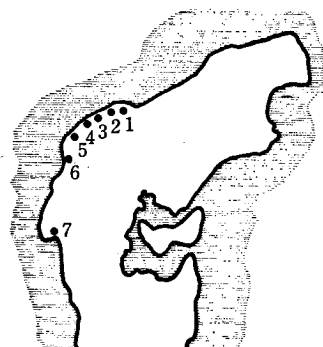
すでに述べた様に、海士町の住居は第3段階で整備さ
れるので、住居の改築や新築が時代の要求や家族構成の
変化に対応出来ず、既存の蔵を改造したり、限られた土
地内に増築を重ねられたりしてコートハウスの形態を
とっているものも少くないが基本的には、舩倉島の住居
に見られる基本パターンの発展の上で捉えることが出来
る。

4. 海士の生活

4-1 海士の漂着・定住

歴史的に見て海士町の始まりは、九州の鐘ヶ崎の漁民
が漂着したものとか「泣き女」、「立ち膝」の風習が朝鮮
の風習と似ているところから、朝鮮人を祖先とする説も
ある。万葉集には舩倉島に海人のある事が、又、今昔物
語には海人の稼ぎ場のあった事が記されている。

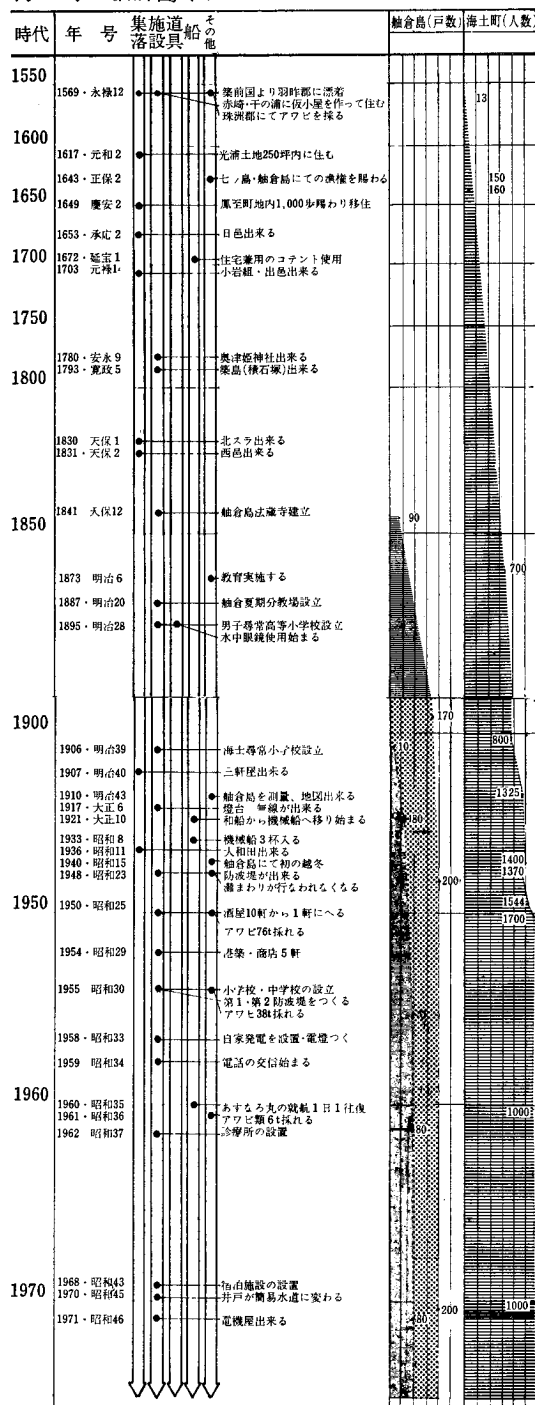
輪島誌に依ると、永禄年間、筑前国宗像郡鐘ヶ崎の海
人又兵衛なる者、漁船三艘に男女12人を率い能登国羽
咋郡に漂着し、赤崎、干の浦海岸に仮小屋を作り、此处
を根拠として同郡及び鳳至郡の沿岸島嶼に鮑を捕る。そ
の後鳳至郡北浦北端に移住し、天正年中藩祖前田利家巡
視の際、のし鮑を献じて調を賜い、舩倉島及び七ツ島に
て鮑を捕ることを許され、又毎年米、塩を給し乾鮑及び
のし鮑を納め、時価を以て買い上げ、諸運上及び米塩



海女の漂着地点

- 1 輪島市天地
- 2 " 光浦
- 3 " 鵜入
- 4 " 赤崎
- 5 門前町皆月
- 6 " 吉浦
- 7 富木町千ノ浦

海士町・舩倉島年表

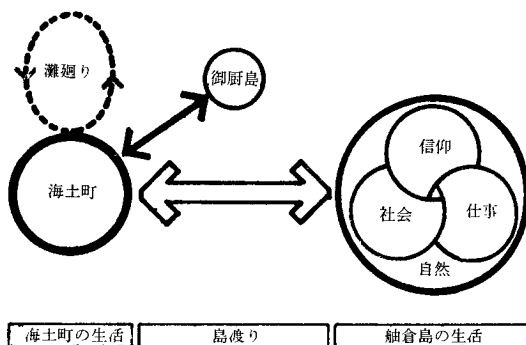


代に換算し、不足あれば納金を命じ、剰余あれば還付する等、特別の保護法を与えたり。寛永年間に至り、男女150人となり、なお一棟の仮小屋に雑居し、のし鮑監督人の巡視するに際し、醜態見るに忍びず、依って転地を請願したりしに、国主前田利常輪島町鳳至町の地内1000歩を割き、之を賜い住居を定めしむ。これが今の海士町である。

輪島に海士町1000歩賜ったお墨付きは40年前の火災で消失したが今でも「天地何番」と番地を数え、舩倉島セツ島は海士町の専有漁場となっている。

4.2 生活のシステム

すでに述べた如く、海士町の人々は島渡り、灘廻り、海士町と一年を三等分した生活を送っていた。



舩倉島における漁業労働の年間配分 (昭和42年調査)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
磯漁業												
ワカメ(女)												
岩ノリ(女)												
一本釣												
アワビサザエ(男、女、子供)												
無動力1~5t												
ブリ1~10t												
刺網												
トビウオ無動力1~5t												
タイ1~10t												

舩倉島年間行事表

1月	正月
2月	
3月	春 祭 節 供
4月	
5月	村 祭
6月	島 渡 り 重蔵神社祭、祇園祭、
7月	恵比須、弁天、金比羅祭
8月	盆 精霊流
9月	帰 町
10月	
11月	灘廻り
12月	恵比須講、大みそか

「天保申届書」に依ると、「八十八夜ヨリ海士一統島渡り秋岸終リニ地方へ帰り申候。稼ノ義ハ、鮑、エゴ、和布類取揚申候。」とある。昔は4間から5間のコtentと呼ぶ帆かけ船で鮑倉島へ渡った。個別に島に渡る事は危険を伴うため、区長が10人組に相談して日取りを決め、天候が悪い場合は島渡りを延期した。島渡りの前には皆寺詣りをし、鳳至町の人々は賑やかな島渡りを見に出たものである。昔は、海士100軒に船が7~80艘あって大体家族で渡り、船を持たぬ人も1割ぐらいあったので彼らは他人の船に便乗した。親方の船は50石積み、子方のは12石積位の船で形は似ているが、親方のは荷物を積む様に作られて居り、鮑採りには使用されない。昔はコtentで鮑も採るし島渡りもし、灘廻りもするという具合で灘廻りの際は家族の寝起きもこれで行われていた。灘廻りは10月から始まり、12月にかかる期間、能登一円、西は諸岡村や羽咋郡迄、東は小木、出津、穴島、七尾、越中の氷見辺り迄出かけていった。灘廻りも途中の災難をカバーするために一斉に船出し、途中迄はまとまって航海した。海士2軒で一村の農家を共同で得意先としている処もあり、稲刈り頃の農家では灘廻りを待ちわびていたという。物々交換は女房が品物を担いで各村を廻り、日帰りして舟に泊った。海女達はサザエ、モタツ、サンマの塩漬、カジメなどを持ち歩き、米と交換した。灘廻りは昭和20年頃から消滅した。

漁業に関する種々の取決めや相談は、舩倉島の番地本位の隣組で行なっており、冬の間の海士町の生活に於ても、島の家並みに依って事を決定している。

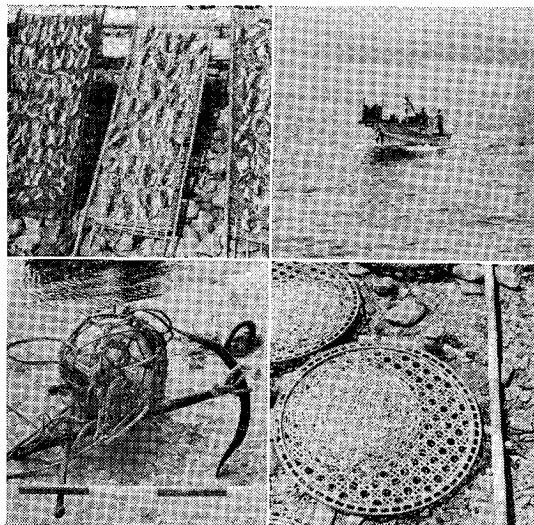
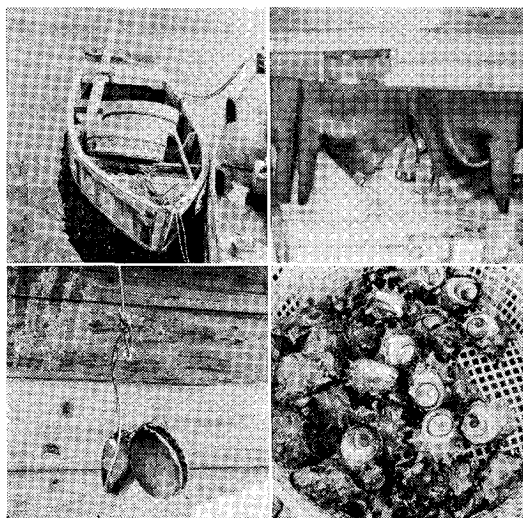
4.3 漁業権

昭和40年に輪島市の8つの漁業協同組合が合併して、輪島市漁業協同組合が発足したが、合併後もかつての漁業権を受け継いでいる。輪島港を中心とする沖合は、輪島崎町の漁業権で、海域隣接する海士町の漁業権は地先になく、舳倉島、七ツ島、嫁礁にもっている。これは海士町の漁民は、もともと土着民でないために地先の漁業権がなく、どこの漁業権にも属していない離れ島で行われていたアワビやサザエの採取が既得権として認めら

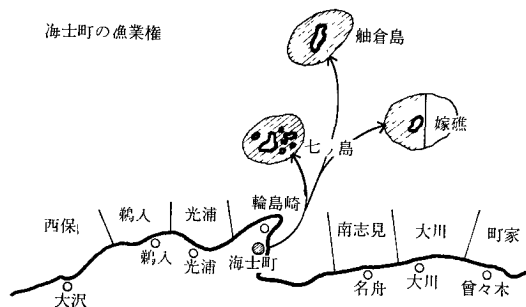
れたものと考えられる。

4.4 海女の漁

鮎倉島に渡った海女は、輪島にいた時とは様相が一変し、快活になって海への闘志を貯えているかの如く見える。天気が良ければ毎日、鮎採りに出かける。海女の乗の小舟には父、夫、兄弟等肉親の男性が相乗りする。昔はサイジと呼ばれる褌一つになって体に 15kg あまりの鉛のおもりをつけ、30M あまりの命縄をつける。最近ではゴム製のウェットスーツを着用している。海女は普通、6~7M から 20M 位迄潜る。年寄りの海女は、ひとりでカチカラを行う。カチカラとは船なしで島の端の磯に行き、浅い所で潜って漁をすることである。鮎は毎年採れるが、エゴは年に依りついたりつかなかったりするが採れる時にはかなりの収入となった。



海士町の漁業権



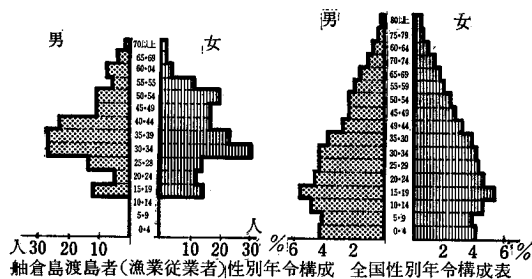
4.5 男 の 漁

昔、男の漁に、アコバ、イカ釣り、鯖釣り、秋刀魚すくい等があった。大和船時代には巻網でも女が乗って行った。それは日帰りで、女は網引きをし、巻網が岩に引っかかると潜ってとるためであった。網元は3人分、船頭は1人と2分、女は1人分、水夫も1人分という分配の仕方であった。機械船になると労働形態も女性中心の鮑、海藻の採取から、一般漁業の比重が大きくなった。港の整備は舢舨島周辺の漁場開拓と共に、日本海漁場への基地としての大きな役割を果たしつつある。

母と娘達が灘廻りを行っている間の冬期間から漁のはじまる迄の間、若い息子達は、大阪、神戸の汽船乗りや労働に行き、和服や羽織を買って帰る様になった。出稼ぎが始まったのは明治末期からで、北海道、九州、大阪に出かけて行ったのが始まりである。現在の舢舨島は、若い者はほとんど島に残らず、島に帰って来るのは、盆と正月だけである。

4.6 人 口 構 造

図は日本全人口の性別年齢構成と舢舨島渡島者のうちの漁業従事者の性別年齢構成とを比較したものである。海士の島である事は海女に適した女性層の15~55才迄の人口は平均した数があり、特に30~39才が多く従事している事が判る。又、海女は夫婦の協同作業であるために同年代の30~44才位の男性が多い。男子の20~24才が少ないのは出稼ぎに出ているためであろう。又、別表で判る様に輪島市で登録されている海女の数114人



輪島における年令別漁業従事者

	総数	15-10	20-29	30-39	40-49	50-59	60以上
男	737	61	196	201	129	93	57
女	398	15	120	122	77	45	19
このうち 海女	(114)	(3)	(18)	(53)	(31)	(9)	(-)
計	1135	76	316	323	206	138	76
(%)	(100)	(6.6)	(27.8)	(28.4)	(18.1)	(12.1)	(6.6)

となっているが、漁業従事者は市全体では男子が圧倒的に多いにも拘らず、女子が舢舨島ではむしろ男子を上回っている事が判る。ここにも舢舨島漁業の特殊性が見られるのである。

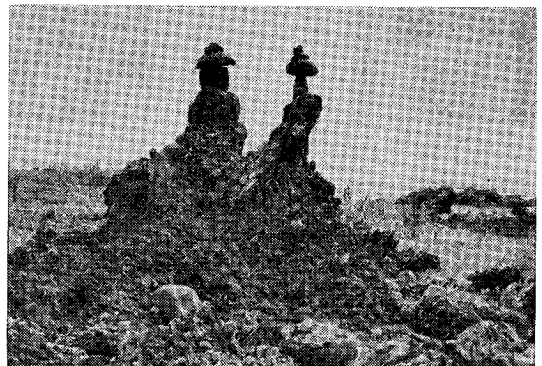
4.7 信 仰

海士町に法蔵院、舢舨島には法蔵院分院という寺がある。住職一家は海士達と共に島渡りをする。海女は50才以上になると寺で一週間の結集を行ない、それが老若の分嶺になる。老人は非常に信仰心が厚く、故人の命日には午前5時前に朝参りをし、花を手向ける。その時の参詣米は寺を立派に維持出来たといわれている。現在の宗派は海士達の持って来た浄土宗で島の分院は13軒時代に創設したものという。島で亡くなる人も一夏に数人あるが北海岸の岩陰で火葬する。その日は海止めとなり喪家が集まり念仏する。

神社の項で述べた様に、島には奥津姫神社をはじめとして数多くの神社、祠が存在している。奥津姫神社の遙拝所は輪島市の海士町にもある。各家は奥津姫神社とそれぞれの字の神とを祀っている。島渡りが終ると奥津姫神社に集まり、豊漁と家内安全を祈願し、海女の老女達は、渡島後、直ちに島廻りをし、33箇所の観音様を巡り、夏の間の安全を祈願するのである。二百十日前後に行われるお盆の行事とそれに続く奥津姫神社の祭は、島の主要な行事となっている。奥津姫神社の祭りはキリコが出て、海辺をねり歩く。特に壮観なのは御輿の出宮、入宮である。全島を二つに分け、出宮の日は、西側の若者が40名位で、女装して御輿をかつぎ、東端の社迄ねり歩き、日没の前にコモリ岩の前であばれた後、社で一泊する。御輿の渡御に先立ち、海女達は沿道を海水で清める。翌日は入宮で、東側の若者達が御輿をかつぎ、西端の奥津姫神社迄ねり歩く。

4.8 御 厨 島

七ツ島は輪島と舢舨島との中間にある群島で、天然の避難所となる入江があり、昔から海士達に利用されてい



た。七ツ島の一つに御厨島があり、島の南岸はいたる所高い絶壁をなし、最高点は 38.9M である。島の東南側の入り込んだ部分に船着き場を作り、ここから海拔20M位迄の斜面に 40 戸足らずの小屋が密集して七ツ島最大の集落をなして居る。舩倉島と同じ様に 6 月に島渡りをして 9 月迄の 4 ヶ月間、漁業の基地としてここに生活をする。この小屋は簡素な仮小屋であり、流木や船の古材などを使用したもので、電気もなく、天水とわずかな湧水を利用して生活をする。舩倉島に於ける集落の発生的段階をここに見ることが出来る。

あ と が き

1969年信楽の調査に始まった我々のサーヴェイも、70年雑賀崎、71年舩倉島・海士町、更に 72年には塩津、郡上八幡、五条、郷原宿、沖繩伊是名島と回を重ねて来た。ここ数年、発表されて来たデザイン・サーヴェイの報告を見ても、その方法に関して、デザインのシステムをテーマとしたものから、生活をテーマとしたもの迄、様々の方法が試みられている。

今回の舩倉島海士町の調査は、海士達の生業の根拠地ともいべき舩倉島の、生活空間を通して、ある自然環境の中で特定の人間集団が生活を形成して行く過程を捉えようとしたものである。日本海上の孤島という比較的外界の影響を受けにくい条件の中で、九州方面より北上して来たある文化形態を持った集団が集落を形成して行く発展の過程は、舩倉島の集落の、空間構成や、造形感情の上にもよく表われて居り、素材のあつかい方や技術の上にも、原形的形態をよくとどめている様である。

当然の事ながら、自然と、人間が生きるための技術と

のかかわり合いの力関係は、それぞれの地域で全く異って居り、それ故に、個性的で豊かな環境や景観を形造っているのである。

近代技術に依る生活環境の造成が、その技術的レベルの高さに依って、自然とのかかわり合いの度を減少させ、その結果、往々にして画一的で没個性的空間を造り出している感がある。

結果をあせってはならないが、我々はデザインサーヴェイを通して、現代人のための豊かな生活空間創造のための姿勢と技術の糸口を見付けたいと願っている。

参 考 文 献

- 1) 能登半島学術調査書 石川県発行
- 2) GEO 6 輪島・舩倉島の研究 富山県立高岡高校発行
- 3) 石川県鳳至郡誌 石川県鳳至郡役所発行
- 4) 輪島町史 若林喜三郎著
- 5) 舩倉島・七ツ島 北国新聞社発行
- 6) 海女 瀬川清子著
- 7) 海女の島 Eマライニー著 牧野文子訳

・ 調査期間

1971年 3 月	能登半島・輪島市予備調査
1971年 5 月	舩倉島予備調査
1971年 7 月22日—8 月 3 日	現地実測調査

・ 協力者及び協力機関

輪島市議会議長
輪島市土木課
輪島市漁業協同組合長
北国新聞輪島支局長
北国新聞社本社社会部
海士町長
舩倉島区長
舩倉ハウス
輪島市航路標識事務所